

## アメリカ人形のこと

旧『矢作小学校沿革誌』をめくっていて、「昭和2年4月18日 亜米利加人形ヲ迎フ」という記事が目にとまりました。他の資料と照合すると、この日に校長先生が県庁でアメリカから贈られた人形をもらったことがわかりました。旧『弥彦小学校沿革誌』では同5月17日付で「亜米利加合衆国ヨリ平和ノ使トシテ来校セシ人形ノ歓迎会学芸会ヲ開催ス 学務委員多賀芳延氏児童一同二菓子一袋宛寄贈」とあり、旧『麓小学校沿革誌』にも5月27日「午前11時ヨリ人形歓迎会 引続キ歓迎小学芸会挙行12時半終了」と記録があって、村の小学校すべてにアメリカ人形が贈られたことがわかりました。

1926年（大正15年）、アメリカの世界児童親善会が人形を日本の子どもに贈る計画を立てました。運動の中心となったギュリック師は滞日20年の大の知日家で、アメリカ全土に広がる排日運動に心を痛め、この関係が少しでも好転するよう「日本の子どもたちへ人形を贈ろう」とよびかけたのです。女の子たちが2ドルずつ出し合って人形が集められ、衣装は子どもたちやお母さんたちが手作りで揃えました。

日本に贈られた12,739体の「青い目の人形」。ひな祭りにあわせて贈られた人形すべてが青い目ではなかったようですが、お腹を押すとママアと泣き、寝かせると目をつむる日本では珍しい人形でした。1体ずつ名前が付けられ、パスポートも添えられていました。日本からは答礼として、子どもたちが1銭ずつ出し合って同年のクリスマスに合わせて58体の市松人形が贈られたといえます。

人形は太平洋戦争に突入すると、敵国の人形としてそのほとんどが処分されてしまいましたが、中には「人形に罪はない」と必死で守ろうとした人々もいたようです。現在では全国で約300体の存在が確認されており、答礼の人形はアメリカで健在だといえます。

村の小学校に贈られたアメリカ人形をめぐって、当時の思い出など情報をお寄せください。